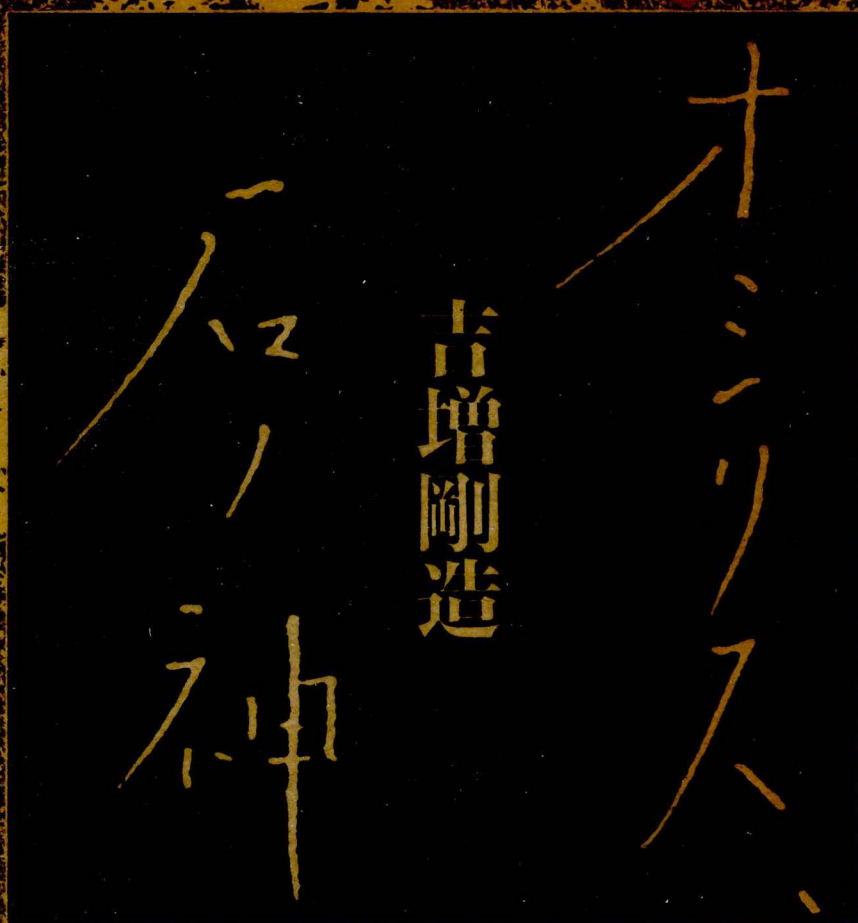
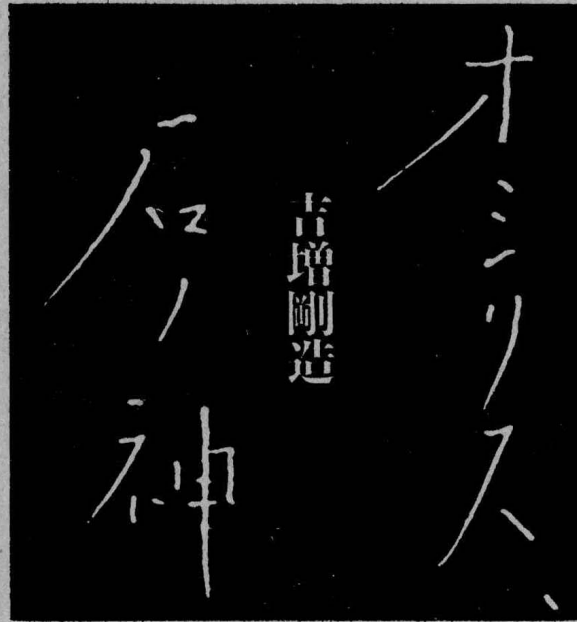






思潮社

吉増剛造―著者 小田久郎―発行者 株式会社思潮社―発行所

東京都新宿区市谷砂土原町三十五 電話―二六七・八一四一(代表)

凸版印刷株式会社―印刷・製本

八四年八月一日―発行日 二四〇〇円―定価 1092-100151-3016

目次

一、オシリス、
神

二、赤壁、入て行つた

三、囃の王

四、織姫

五、シバ、植菜

六、好麻子、好麻子

七、環女

八、比木田山

九、色巴物の

十、菜に咬む、阿修羅に連れらる

十一、エキ？、エキ

42

36

十二、せ田谷ノ繁ミの奥へ 44

十三、若林倉一武蔵野の部屋へ 48

十四、大倉起せよアムンゼン 50

十五、アムンゼン 54

十六、ロサンヘレス人 60

十七、荒地にて 68

十八、野にアムンゼン湖 72

十九、ツシ 76

二十、其消えた夕闇ノ月 78

の聲とツシ 80

二十一、人々 80

裝幀 菊地信義

オシリス、石ノ神

オシリス、石ノ神

穴虫峠トイウトコロヲ通ツテ、二上山マデ、齒ヲクイシバツテ考エテイタ。コフンナノダロウカ、コダカイ丘ガイクツカ、電車ハ、オオサカト、ナラノ県境ニカカツテイタ。

コレハ墓、ト考エテ、ソシテ映画デミタ、古代ノ、エジプト人の、老イタ夫婦ノ姿ガ浮カンデ、ワタシニ、話シカケタ。映画デ起ツタコトガ、キョウ、イマニ立チ上ツテイタ。

老夫婦ハ、話シカケタ、ワタシドモノ子ガ、一人息子ガ放蕩息子デシテ、賭事のカタに、トウトウ、私共ガ、死ンデカラ行クハズノ、墓ヲ、売ツテシマッタノデス……。

氣ガツクト、私ハ齒ヲクイシバツテ、車内ニ居タ。氣ガツイタノハ、電車ガ、山ヲ下リハジメ、スビードヲアゲタメダツタ。

二上山駅マデハ、モウ、十秒カ十五秒、私ハ、別ノ境界ガ窓カラ入り込ンデクルノヲ認メツツ、大急ギデ、ボールペンヲ走ラセタ、ボールペンヲ走ラセテイタ。

一人駅員ノ駅ヲ出テ右ニ折レルト、二上山ガ前ニアル。

コレハ、緑ノフタツナル山、頬ヲ染メ、ソノ柔カナマルイ山、囁イタノハエジプト人夫婦ナノ

カ私ナノカ判ラナイ、オシリス、オシリス、トイフ、女(?)、カミガ、路傍ニ、イタ。

不思議ナコトダ、死後ノ住居マデモ、放蕩息子ニ、売り払ワレテシマッタ、ソノフタオヤ(親)ハ、悲シンデハイナカッタ。

死後ニ、行ク処ガナクトモ、モオ、イイノデス。ソシテ、私ノナカノミチヲ岩壁ニソツテ、歩イテ行ッタノダッタ。

道端^{ミヅバタ}デ、タクシー待チヲシテイタノカ、若イ、デモ、薄イムラサキノブラウスダッタナ、オンナニ、アノ、フタエマブタノ、美しい山ガ、二上山ナノデスカ……ト訊ネテ、笑ッタ。ソシテ、スコシ話ヲシテ、ソコカラ、駅ニモドッタ。

モオイイノサ。

私コノ土地ノ者ジャナイノデス。
オシリス。

薄イムラサキノブラウスダッタ。
美しい山。

細イ下リノ道ヲ降りテ、駅マデ歩イタ。次ノ電車マデ、三十分クライ時間ガアル。一人駅員

ガ、近所ノ人ラシイ、女ノ人ト話シテイル、オ金ノコト建テタ家ノコト。聞キナガラ、私ハ、踏切リニ下リテ、見ラレナイヨウニ、石ヲ二ツヒロッタ、ヒロツテ、急イデバツグニ入レタ。

ホームヲ、向ウ側ニ、渡ツテ、木製ノベンチ、屋根ツキノベンチニ、腰掛ケテ、書キハジメルト、緑ノ柔カナ美しい山ガ、覗イテイル。ソコニ坐ツテ、マタ、一心ニ書キハジメテイタ。

氣ガツイタノハ、電車ガ山ヲ下リハジメ、スビードヲアゲテ、入ツテ来タタメカ、アワテル、持物ヲツカンデ、車内ニ入ロウトシタガ、木製ベンチガ離レナイ、背広入レノ吊リ金具ガ、木製ベンチノ隙間ニ入ッテ、ヒツカカッテシマッタノダ。

氣ガツクト、木ハ折レテ、立ッテイタ。力ヲ入レテ、車内ニ、駈ケコムト、窓ノ向ウノ木製ベンチノ木ハ折レテ立ッテイタ。木ガ折レテ、立ッテシマッタ。

怒ルヨウナ感情ニ襲ハレテ、ソノタメニ、一人駅員サンノ、駅ノ景色ガ、水中ノ幻境ノヨウナ光（景色？）ヲ残シタ。

齒ヲクイシバツテ書イテイタノハ私ダッタ、木ガ折レテ、立ち上ッテイタ。
フタタビ、古代エジプト人の、老イタ夫婦ノ聲ガ聞コエテ来タ。

モウイイノデス、私共ノ放蕩息子ガ……、

薄イムラサキノブラウスダッタ。

美しい山。

私は語り手なのだろうか。座席ニ坐ッテ、（二上山駅ノ木製ベンチに、腰掛けていた）私？
（あるいは誰かが）坐っている姿は誰？

木ガ折レテ、立チ上ッテイタ。
ソノ周リヲ、蛇ガ廻ッテイタ。石ヲ二個、腹ニノンデ、静カニ、蛇ガ廻ッテイタ。

赤壁に入って行った

炎暑八月、私の眼に赤壁が映った。川のむこう、鉄橋はかかっていない。総重量噸はどうやってはかるのか。私の、視線を吊り上げはじめた。川のむこう、聳えている赤壁に、その内奥に彫刻物が忍び込んで、はっしている光がみえる。

光がみえる。

山中の川幅は、五十メートル位、川床は岸から下って三メートル？

私は測量士、川筋の、私は測量士だ。

川の川底を大水が通って行ったのはきのうのよるのこと？ そのまたきのうのあさのこと？
下流に向って靡いている、土砂にまみれてひかる草木に話しかけた。

私、交換手？ 私は交換手？

大蛇のように怒って？ 豊かに？ きのうのよるなのか、きのうのあさなのか、通って行った、大水の背丈を測ると、貴女は、一メートル七十五センチだ。熱い息吹きを感じる、背に脚に股に胸に背筋に……抜き去るように、身体を吊り上げて、岸に身体を揚げて行った。

私は、河川の游泳監視員？ 游泳監視員？ 判らない。

脇に、鮎供養塔が立っていて、その聲におどろく。

そばに行くと、私達の聲も囁くように優しくなる。そのそばに行くと、細かくきらめく小魚や魚の聲が聞こえて来た。私達は清流のイメージを、しばらくさわって、つかまえていた。

砂の物？ 砂の物？

そのとき、低くなり小山になり、小聲になって、鮎や鮎の頬に指をつけていた、砂になった、私は流れた？

そして、ふりかえると、対岸の大赤壁は、一メートルか二メートル、こちらの岸へ傾きかけ、石火、炎の貌――、その奥に宇宙も幾つか、彗星も、熊も、そして、私の掌にいたバードストーンも、赤壁の空を跳んでいた。

古座上流、一枚の大きな壁のたつ不思議なところ。

こさかな、こさか、
な、そこさかな。

八月十一日

赤壁に私は入って行った。

啞の王

コマ駅は此の方ですか？　コーマ駅は？

訊ねている私の聲は、汽働車に乗って、八王子から、ハコネガサキを通り、大水の通った、乱聲のように跡を残す、中洲に、私は分身を吊り下ろし、窓に左腕をかけて、幾つか、峠を下り終えたと、ああ、これも、小アルカディアだな、呟く町を幾つかみつけて来た。

私の聲、石の聲？

きのうのしずかな夕闇は、いまから数えてまだ、十七時間前なので、小橋（こばし）を渡って振り返り、川岸のテント幾つ、ナンの色かと振り返り、そして、夕闇に、仰向けに寝る王の姿が目に入った。

王だな、そう王だな。

啞の聲、石の聲？

数日前、友人の小説家に連れていってもらって見た（眼の底に聳え立った）熊野山中の赤壁に、